

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：21301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K17405

研究課題名(和文) 東日本大震災後長期避難生活における循環器疾患をもつ人の身体認識の構造化

研究課題名(英文) The Structure of the Physical Recognition of People with Cardiovascular Disease who Long-term Refugees after the Great East Japan Earthquake

研究代表者

勝沼 志保里(katsunuma, shihori)

宮城大学・看護学群(部)・助教

研究者番号：10794323

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)： 災害後の循環器疾患をもつ人の身体の認識は、3つの要素：自己の身体への注意と観察、災害前との比較を通しての身体症状・徴候の変化の自覚、災害後の身体の変化の解釈で構成されている。災害後の身体認識は、被災体験、個々の生活上の課題の過程に伴い変化する。また、災害後の身体認識は、被災体験、個々の生活上の課題の過程に伴い生じた災害後の生活状況、家族や周囲の人との関係性、精神状態の変化により影響を受けることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、災害を体験した循環器疾患をもつ人の対象理解を深め、災害後の看護ケアの提供が必要となる時期、被災した循環器疾患をもつ人の心身の状態をアセスメントする視点、看護援助の提供方法や実施内容などの実際の看護ケア提供の手がかりとなる。また、本研究は応急仮設住宅に暮らす人々の健康と生活を支える看護職者が減少する時期に焦点を当てたため、応急仮設住宅の時期の支援の重要性を示し、被災した人々の健康支援活動に携わる被災地内外の看護職者が効率よく、かつ効果的に支援することを可能にする。

研究成果の概要(英文)： The physical recognition of people with cardiovascular disease after disaster has three components: attention and monitoring of one's body, awareness of physical changes in physical symptoms and signs through comparison with before the disaster, and interpretation of physical changes after a disaster. Post-disaster physical recognition changes with the experience of the disaster and process of individual life tasks. Factors affecting physical recognition after disaster were post-disaster living conditions, relationships with family members and people around them, and mental conditions.

研究分野：災害看護学

キーワード：災害 応急仮設住宅 循環器疾患 身体認識

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、自然災害は世界的に増加傾向にあり、その様相は大規模化・多様化・長期化している。災害は人々の生命だけでなく、災害後長期に渡って健康と生活を脅かし、災害による人々の生命・暮らし・健康のリスク及び損失の削減は、世界共通の重要な課題である。日本では、2011年の東日本大震災により、東北地方の太平洋沿岸部に広範囲かつ深刻な被害がもたらされ、死者・行方不明者は18,000人に上った(警察庁緊急災害警備本部, 2016)。また、この震災で自宅を失った人々は、度重なる住まいの移動を余儀なくされ、応急仮設住宅での暮らしは、最大で震災後10年まで続いた。災害で自宅を失い、応急仮設住宅で暮らす人々の身体的・精神的負担や疲労は大きく、3,472人の災害関連死が報告されている(復興庁, 2016)。災害関連死は、過酷な避難所生活や避難所から応急仮設住宅に移行する時期の震災後3ヶ月間に最も多く発生し、その後も数年に渡って発生し続け、特に何らかの既往症を有する者や60歳以上の高齢者に多くみられている(復興庁, 2012)。これを受けて、2015年に開催された第3回国連防災世界会議では、『仙台防災枠組2015-2030』が採択され、優先行動の一つに、重い病気の人や慢性疾患患者へ相応のケアを行うことの重要性が示された(防災・減災日本CSOネットワーク, 2015)。

応急仮設住宅住民の健康調査によると、震災後2~3年の住民の7割以上が高血圧、糖尿病、脂質異常症、心疾患などの慢性疾患をもっており、このうちの6割以上の人々が身体的・精神的自覚症状を訴え、2割弱は健康状態が悪いと感じていた(勝沼ら, 2013)。慢性疾患の中でも循環器疾患は、災害後の急激な生活の変化やストレスの影響を受けやすく、震災後数か月間の発症者数の増加や震災後のストレスの経年的な増加が報告されている(下川ら, 2014)。また、災害関連死の最も多い死因としても報告されている(西村ら, 2005)。このことから、災害後の循環器疾患をもつ人の病状の管理や療養生活への支援が求められている。一方で、循環器疾患をもつ人の災害後長期における看護支援の具体的方略は開発されておらず、災害が頻発する現在では、早急に看護介入プログラムを確立する必要がある。平常時における循環器疾患をもつ人への看護ケアでは、循環器疾患は進行性の病気であるものの病状経過が緩慢で身体的症状に乏しいため、その人自身が日頃から食事、睡眠・休息、身体活動などの生活を振り返り、早期に身体の変調に気づき対処できるようにすることが求められる。災害後もまた意図的に自己の身体や生活に注意を向け、早期に身体の変調に気づき対処できるように看護職が働きかけていく必要がある。しかしながら、災害後の生活状況の変化に伴い、循環器疾患をもつ人が自身の身体にどのように注意を向け、どのように身体感覚や症状を認識しているのかについては十分に明らかになっていない。このため、本研究では、応急仮設住宅で暮らす循環器疾患をもつ人の災害後長期における看護介入プログラムの開発を目指し、災害後の循環器疾患をもつ人の身体認識の構造化を図ることを目的とした。

### 2. 研究の目的

東日本大震災後、応急仮設住宅に暮らす循環器疾患をもつ人の生活状況や身体の状態の変化に伴う自己の身体認識の構造化を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究デザイン

本研究のデザインは、災害後という特殊環境下に着目した循環器疾患をもつ人の身体認識の先行研究による基礎的知識の蓄積がなく、現象そのものの探索が必要であることから質的記述的研究とする。

#### (2) 研究対象者

成人期に循環器疾患を発症した人で、災害前より病状が安定し自宅で療養生活を送っていた人とする。また、東日本大震災を体験し、応急仮設住宅に暮らしている人、あるいは暮らした経験のある人とする。

#### (3) データ収集

東日本大震災後の応急仮設住宅住民への健康支援活動記録の調査

研究者が東日本大震災後の2012年~2013年までに沿岸部被災地で実施した健康支援活動の記録(健康相談票、フィールドノート)から、研究対象に該当する循環器疾患をもつ人を選定し、同意を得られた住民の記録を分析対象とした。健康相談票には、震災後2~3年までの1年間の相談内容、血圧、脈拍、体重などが記録され、フィールドノートには当時のインフォーマルインタビューや観察記録が記されている。身体認識の主観的データであるため、当時の身体感覚や症状についての詳細確認を面接で行った。

自然災害により、現在、応急仮設住宅に暮らしている人への半構造的インタビュー調査

健康支援活動記録の分析は、研究開始時点で東日本大震災から7年が経過していたため、研究協力者の高齢化に伴い語り十分に得られない可能性や、研究対象者が転居や死亡などにより研究協力が得られない状況が見込まれ、身体認識の構造化を図るための十分なデータが得られないことが想定された。データを補うために、東日本大震災に限定せず、自然災害で被災し応急仮設住宅に暮らす循環器疾患をもつ人に半構造的インタビューを実施した。

(4) 分析方法

(3) で得られたデータを質的記述的に分析した。また、循環器疾患を持つ人の身体の知覚・認識、病気の体験、療養生活に関わる先行文献の検討ならびに健康支援活動記録とインタビュー内容の分析結果を比較検討し、類似点・相違点などを抽出した。この結果をもとに、災害後の循環器疾患を持つ人の身体認識の構造図(案)を作成した。

(5) 倫理的配慮

本研究は、宮城大学研究倫理専門委員会の承認を受けて実施した。また、日本学術振興会「科学の健全な発展のために 誠実な科学者の心得 (研究倫理 e-ラーニングコース)」を受講した。さらに、本研究の対象者は災害により被災した人々であることから、日本トラウマティック・ストレス学会(2006)の「被害者・被災者を対象とする調査研究のための倫理的ガイドライン」に基づき調査を実施した。

4. 研究成果

研究開始当初は、東日本大震災を経験し応急仮設住宅に入居した循環器疾患をもつ人を対象に身体認識を構造化することを試みた。しかし、健康支援活動記録の分析に同意を得られたのは6名(男性2名、女性4名)で、東日本大震災から7年が経過し研究協力者の高齢化に伴い語り十分に得られなかったこと、他の研究対象者が転居や死亡などにより協力が得ることが難しかったことから、身体認識の構造化を図るための十分なデータを得ることができなかった。データを補うために、東日本大震災に限定せず、自然災害で被災し応急仮設住宅に暮らす循環器疾患をもつ人8名(男性2名、女性6名)に半構造的インタビューを追加実施した。

災害後の循環器疾患をもつ人の生活状況の変化に伴う身体の認識は、3つの要素で構成された。1つ目は「自己の身体への注意と観察」、2つ目は「災害前との比較を通しての身体症状・徴候の変化の自覚」、3つ目は「災害後の身体の変化の解釈」であった。これらの3つの要素は、発災時の被災体験と、その後の個々の生活上の課題や関心事の時間経過に伴い変化していた。

構成要素の一つである「自己の身体への注意と観察」は、災害後の混乱・混沌とした状況の中では平常時のように注意が向きづらく、災害支援による医療従事者との関わりや、混沌とした中でもふとした時、一息ついた時などの瞬間に訪れ、その中で身体の観察がされ身体の情報を集めていた。「災害前との比較を通しての身体症状・徴候の変化の自覚」では、災害前の身体の症状・兆候を基盤とし、災害後の身体の変化と比較しながら災害後に生じた身体の変化を自覚していた。「災害後の身体の変化の解釈」は、個々の被災体験、生活上の課題・関心事の経過に伴って生じる災害後の生活状況、家族や周囲の人々との関係性、精神状態の変化の影響を受けることが明らかになった(図1)。

さらに、災害後の身体の認識には3つのパターンがみられた。1つ目のパターンは、災害後の自身を取り巻く環境の変化や精神状態の揺らぎを受けながらも、災害前の自分の身体の症状・兆候を基盤に、災害後の身体の変化に気づき、解釈することができていた。2つ目のパターンは、災害前は自分の身体を症状・兆候を観察していたが、災害後の急激な生活の変化や精神状態の揺らぎにより、自己よりも自分を取り巻く環境や生活再建上の課題に関心が向き、自分の身体の症状・兆候に気づくのが遅れ、病状の悪化を招いていた。3つ目のパターンは、災害前から自分の身体の症状・兆候への気づきや解釈ができておらず、災害後も自分を取り巻く環境や周囲の人々との関係性に振り回され、災害後の身体の変化に気づきながらも解釈できないまま、病状の悪化を招いていた。

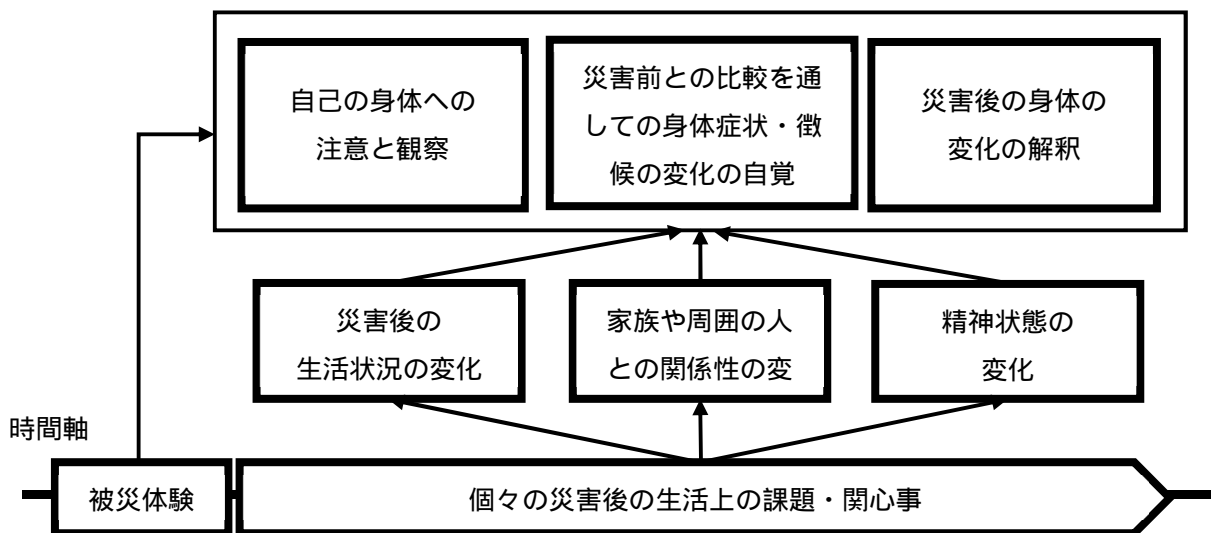


図1. 災害後の循環器疾患を持つ人の身体認識

<引用文献>

- 防災・減災日本 CSO ネットワーク. (2015). 仙台防災枠組み 2015-2030, [https://sendai-resilience.jp/media/pdf/sfdrr\\_2.pdf](https://sendai-resilience.jp/media/pdf/sfdrr_2.pdf)
- 復興庁. (2016b). 東日本大震災における震災関連死の死者数 (平成 28 年 3 月 31 日現在), [http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-6/20160630\\_kanrenshi.pdf](http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-6/20160630_kanrenshi.pdf)
- 警察庁緊急災害警備本部. (2016). 平成 23 年 (2011 年) 東北地方太平洋沖地震の警察 地と被害状況, [https://www.npa.go.jp/news/other/earthquake2011/pdf/higai\\_jokyo.pdf](https://www.npa.go.jp/news/other/earthquake2011/pdf/higai_jokyo.pdf)
- 勝沼志保里, 山本あい子, 吉田俊子 ... 野並葉子. (2013). 東日本大震災における被災 2 年後の仮設住宅住民の生活・健康調査. 日本災害看護学会誌, 15(1), 165
- 西村明儒, 山内春夫, 出羽厚二. (2005). 日常に潜む震災のリスク - 阪神・淡路大震災と新潟中越大地震、被災死亡者の調査結果から -. 新潟県医師会報, (666), 2-9.
- 下川宏明ら. (2014). 東日本大震災後の被災地の心臓病患者における精神的ストレスの増加 [http://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohokuuniv-press\\_20140224\\_02.pdf](http://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohokuuniv-press_20140224_02.pdf)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----